

機関番号：26201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～2010

課題番号：20592638

研究課題名（和文） 高齢化戸建て団地の住民組織形成モデル構築とその過程における住民と保健師の役割分析

研究課題名（英文） Constructing a model for forming community associations in housing estate with aging residents, and analyzing the roles of residents and public health nurses in the process

研究代表者

合田 加代子 (GOU DA KAYOKO)

香川県立保健医療大学・保健医療学部・看護学科・准教授

研究者番号：20353146

研究成果の概要（和文）：

戸建て団地におけるコミュニティづくりの展開は、1. 地域診断による健康課題の明確化とビジョンの共有 2. コミュニティづくりを目指す住民組織づくり 3. 住民組織のコミュニティ・エンパワメントであった。住民は住民組織を結成し、民主的組織運営をしながら団地の実態把握に基づく主体的学習を基に直接住民に関わる役割を担い、支援者は活動の道筋を示しつつ、住民組織の地域志向性を目指した主体的活動を支援する役割を担うことであった。

研究成果の概要（英文）：

With regard to building communities in housing estate, we identified the following key factors:

1. Defining health issues by community diagnosis and sharing a vision
2. Developing a community association with the objective of building the community
3. Empowering the community through community association activities

It is important for residents to form community associations, manage them democratically, and provide services directly related to themselves based on their studies and understanding of the actual condition. On the other hand, it is important for supporters to map out directions for the residents' activities and support them with regional orientation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：地域・老年看護学

キーワード：戸建て団地、高齢化、住民組織、コミュニティづくり、保健師

1. 研究開始当初の背景

わが国では、1960年代に都市計画法の改正に伴う団地開発が全国的に進み、当時働き盛りの年代が戸建て住宅を購入し一同に入居する現象がみられた。50年後の現在の団地では、急激に団塊的に進む高齢化現象とともに、職域中心の生活、近所付き合いの希薄化、家族の小規模化等により、生活共同体としての機能崩壊を招くことが危惧されている。既に、高齢者の孤立化や社会生活の狭小化などの問題を表出させている。しかし、高齢化団地に関する研究は集合団地住民を対象にしたものが散見される程度である。

2. 研究の目的

本研究では団塊的高齢化という特性を有する戸建て団地を対象に、健康を核に共同体意識の醸成を目指し、皆が高齢になっても安心して暮らせるコミュニティづくりに住民主体で取り組むための住民組織形成モデルの構築とその過程における住民と保健師の役割を明らかにする。

3. 研究の方法

1) 研究対象戸建て団地は、郊外丘陵地に立地し、世帯数169、人口422人、高齢化率24.9%、1世帯人数2.5人で、高齢者の夫婦世帯や単身世帯が73%を占める(2006年10月1日住民基本台帳)。県外出身者が8割を占め、共同体意識の希薄さが課題となっている。

2) 研究方法は、参加型アクションリサーチを基本とする介入研究とし、住民・行政・大学間でプロジェクトを結成し、協働研究として実施する。主な活動は、①住民組織発足支援及び活動力育成支援(定例会、研修会(個別支援法・集団支援法・地域づくり等)②実態調査(全戸調査、高齢者全戸調査、家族構成調査)③高齢者支援(声かけマップ作成・声かけ訪問、おしゃべり会)④環境整備(共有空間のバリアフリー、防災マップ等)⑤団地内交流(大学祭参加、コミュニティ紙発行等)⑥啓発活動(団地サミット、出前講座、福祉広報等へ投稿)等とする。評価は、①高齢者全戸調査(初回と活動評価調査)②健康度測定(毎年実施)④住民組織代表へのインタビュー⑤参加観察⑥その他とする。

研究期間は、2005年から2011年現在継続的に実施とする。

3) 倫理的配慮

本学倫理委員会の承認を受けた後、行政とは共同研究の誓約書を交わし、対象団地とは自治会長から全住民に周知の上合意を得た上で実施した。なお、実態調査やインタビューの際にはその都度文書および口頭にて説明し同意を得て実施した。

4. 研究成果

戸建て団地におけるコミュニティづくりのプロセスは、1) 地域診断による健康課題の明確化とビジョンの共有(①戸建て団地の健康課題の明確化と協働活動、②団地住民代表とのコミュニティづくりの合意形成、③住民同士の出会いと対話を促進する場の設定、④健康課題の認識とコミュニティづくりのビジョンの共有)、2) コミュニティづくりを目指す住民組織づくり(①健康づくりに取り組む自主グループの結成、②コミュニティづくりに取り組む住民組織の結成、③住民組織の活動体制の整備)、3) 住民組織のコミュニティ・エンパワメント(①住民組織の地域活動力育成、②住民組織の地域志向性の拡大)であった。

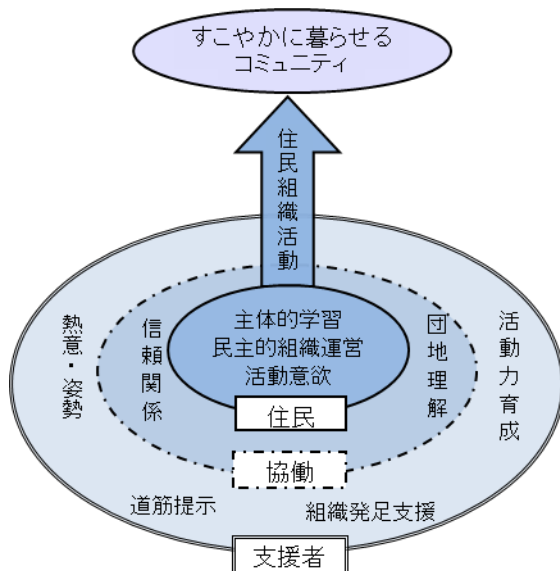
その継続的協働研究の評価は、住民組織会員8名に団地の変化および変化に効いた要因について半構成的インタビューを実施した。分析は逐語録を作成し、団地の変化に効いた要因の文脈を抽出し、住民側の要因と支援者側の要因に分類し、コード化、サブカテゴリ化、カテゴリ化を行った。その結果、対象団地の変化については、〈近所付き合いの増加〉、〈高齢者の交流の増加〉、〈共同体意識の芽生え〉、〈相互扶助精神の高まり〉、〈緩やかな変化の実感〉が認められた。さらに、これらの変化に効いた要因として、住民側の要因は〈活動の裏付けとなる団地理解〉、〈住民組織の発足と民主的運営〉、〈住民組織の主体的学習〉、〈住民組織の主体的活動〉、〈反響が高まった活動意欲〉であった。支援者側の要因は〈多角的な団地の地域診断〉、〈住民組織の発足支援と活動力育成〉、〈コミュニティづくりの道筋の提示と協働〉、〈支援者の熱意と姿勢〉、〈住民との信頼関係〉であった。

これらに基づき、住民主体のコミュニティづくりの展開における住民と保健師の役割について考察した結果、それぞれの強みや専門性を発揮する役割と協働で担う役割が見出された。すなわち、住民は住民組織を結成し、民主的組織運営をしながら、団地の実態把握に基づく主体的学習を行い、団地住民への個別支援、集団支援、世代間交流行事の開催という直接住民に関わる役割を担っていた。その際、住民組織メンバーのリーダーシップの発揮とメンバーが中心となるネットワークによって団地全高齢者をつなげ、住民の生活の場に出向くアプローチは、とくに重要な役割であった。一方、支援者の役割は、活動の道筋を示しつつ、住民組織の地域志向性を目指した主体的活動を支援することであった。この役割の背景には、パートナーとしての住民との信頼関係を基盤に、住民の認識段階をよりの確に捉え、その認識に寄り添いながら具体的内容や方法の提案を適時に示す役割、

つまり住民の中にある漠然とした曖昧な判断を協働活動を通して読み取り、さりげなく意図的に明確にする役割を果たしていた。なお、その根底には保健師等支援者間の協議や研究活動によって根拠を探索し続けるという重要な役割があった。

今回、戸建て団地という小地域における住民主体で進めるコミュニティづくりのモデルを住民との協働研究によって構築し提示することができた。住民の価値観が多様化している現代、従来の市町村単位や校区単位で広域的に地域のつながりをつくることは困難になりつつある。とくに、高齢者の孤立予防においては公的サービスだけでは行き届かない日常生活の中における住民同士の付き合いの豊かさを培わなければならない。本研究では、小地域単位でのコミュニティづくりを展開したことで、全戸調査や世帯構成の把握により高齢者支援マップの作成等が可能になり、住民組織メンバーを核とするネットワークにより全高齢者をつなげるしくみができた。さらに身近な場に地域資源を創出し高齢者の社会参加や世代間交流を促進する効果も認められた。これらの点から小地域単位で進めるコミュニティづくりの有効性が実証された。

したがって、このモデルは戸建て団地はもとより、小地域単位でのコミュニティづくり推進においては有用かつ転用可能なモデルである。



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 合田加代子、高嶋伸子、辻よしみ、國方弘子、中添和代、佐々木純子、古免里子、岡本玲子、戸建て団地におけるコミュニティづくりの波及を目指して開催した「団地サミット」の反響、四国公衆衛生学会誌、56(1)、79-83、2011、査読有
- ② 合田加代子、國方弘子、高嶋伸子、辻よしみ、中添和代、戸建て団地に暮らす高齢者の歯の健康状態と積極的自尊感情・老年うつ・外出状態との関連 日本看護研究学会誌、33(4)、51-57、2010、査読有
- ③ 辻よしみ、中添和代、高嶋伸子、合田加代子、國方弘子、岡本亜紀、団地住民の体力測定と運動習慣との関係、香川県立保健医療大学雑誌、1(1)、127-33、2010、査読有
- ④ 合田加代子、高嶋伸子、辻よしみ、國方弘子、中添和代、高齢化戸建て団地における孤立死予防活動ー住民が行う高齢者支援活動『ミニデイ』の成果ー 四国公衆衛生学会誌、55(1)、133-137、2010、査読有
- ⑤ 高嶋伸子、大池明枝、合田加代子、辻よしみ、森口靖子、中添和代、大浦まり子、太田武夫、高齢化が進行する団地における世話役の特性、四国公衆衛生学会誌、54(1)、112-115、2009、査読有

[学会発表] (計 20 件)

- ① 林佳子 (代表)、高齢化戸建て団地における老年うつと主観的健康感の経年変化 日本看護研究学会第 24 回中国・四国地方会学術集会、2011 年 3 月 6 日、徳島市徳島大学
- ② 合田加代子 (代表)、戸建て団地におけるコミュニティづくりの成果ー自主組織会員が捉える団地の変化ー、第 69 回日本公衆衛生学会総会、2010 年 10 月 29 日、東京都東京国際フォーラム
- ③ 辻よしみ (代表)、戸建て団地の高齢者の転倒歴と社会交流の関連、第 36 回日本看護研究学会学術集会、2010 年 8 月 21 日、岡山市岡山コンベンションセンター
- ④ 高嶋伸子 (代表)、戸建て団地の高齢者を対象とした趣味活動と心理・社会的健康との関連、第 36 回日本看護研究学会学術集会、2010 年 8 月 21 日、岡山市岡山コンベンションセンター
- ⑤ 合田加代子 (代表)、戸建て団地におけるコミュニティづくりの波及を目指して開催した「団地サミット」の影響、日本地域看護学会第 13 回学術集会、2010 年 7 月 10 日、札幌市北海道立道民活動センター
- ⑥ 中添和代 (代表)、高齢化が進む団地の体力測定継続者の特性、日本看護研究学会第 23 回中国・四国地方会学術集会、2010 年 3 月 7 日、香川県三木町香川大学

- ⑦ 合田加代子（代表）、高齢化戸建て団地における孤立死予防活動－住民が行う高齢者支援活動を通じた高齢者の実態把握－、日本看護研究学会第23回中国・四国地方会学術集会2010年3月7日、香川県三木町香川大学
- ⑧ 合田加代子（代表）、戸建て団地に暮らす高齢者の歯の健康状態と自尊感情・老年うつ・外出状態との関連、第14回日本在宅ケア学会学術集会、2010年1月23日、東京都聖路加看護大学
- ⑨ 辻よしみ（代表）、戸建て団地に住む住民の生活と健康度の実態、第68回日本公衆衛生学会総会、2009年10月21日、奈良市新公会堂
- ⑩ 合田加代子（代表）、高齢化戸建て団地における孤立死予防活動とその成果、第68回日本公衆衛生学会総会、2009年10月21日、奈良市 新公会堂
- ⑪ 合田加代子（代表）、高齢化戸建て団地における自主組織の地域指向性からみた評価日本地域看護学会第12回学術集会、2009年8月8日、千葉市OVTA
- ⑫ Tsuji Y（代表）、Relation between Physical Fitness Assessment and QOL in Middle-aged Japanese、APHPE「第1回アジア太平洋ヘルスプロモーション健康教育学会」、2009年7月18日、千葉市幕張メッセ
- ⑬ 人見裕江（代表）、一戸建て住宅団地に住む後期高齢者のふだんの生活機能に関する研究、第28回日本看護科学学会学術集会、2008年12月6日、福岡市福岡国際会議場
- ⑭ 岡本亜紀（代表）、高齢化が進む一戸建て団地住民における歯の状態と自尊感情・抑うつとの関連、第28回日本看護科学学会学術集会、2008年12月6日、福岡市福岡国際会議場
- ⑮ 中添和代（代表）、高齢化一戸建て団地に住む高齢者の健康づくりに関する研究－社会経済的地位と健康－、第67回日本公衆衛生学会総会、2008年10月6日、福岡市福岡国際会議場
- ⑯ 高嶋伸子（代表）、戸建て団地の高齢者を対象としたソーシャルキャピタルと健康、第67回日本公衆衛生学会総会、2008年10月6日、福岡市福岡国際会議場
- ⑰ 合田加代子（代表）、戸建て団地に住む高齢者の歯の健康と社会生活との関連、第67回日本公衆衛生学会総会、2008年10月6日、福岡市福岡国際会議場
- ⑱ 人見裕江（代表）、団地に住む高齢者のうつ症状とふだんの生活機能に関する研究、日本地域看護学会第11回学術集会、2008年7月6日、那覇市琉球大学
- ⑲ 辻よしみ（代表）、団地に住む高齢者の生

活機能と地域活動、日本地域看護学会第11回学術集会、2008年7月6日、那覇市琉球大学

- ⑳ 合田加代子（代表）、高齢化一戸建て団地に住む高齢者の団地への愛着度に関連する要因、日本地域看護学会第11回学術集会、2008年7月6日、那覇市琉球大学

〔その他〕

- ① 科学研究費補助金研究成果報告書（平成20-22年度）「高齢化戸建て団地の住民組織形成モデル構築とその過程における住民と保健師の役割分析、2011.3
- ② コミュニティ・ネットワーク会議開催、香川県立保健医療大学、2010.12.4
- ③ 高松市公民館講座「小地域サロン」ワークショップ開催、新八栗台団地、2010.7.24
- ④ 高松市公民館講座「小地域サロン」ワークショップ開催、日東八栗台団地、2010.9.24
- ⑤ 産学連携・地域連携事業において研究活動紹介、2009.12.1
- ⑥ 「団地サミット2009」開催、香川県立保健医療大学、2009.3.24
- ⑦ 講演：保健師アップグレード学習会「戸建て団地における高齢者の孤立死を防ぐ取り組みとその成果」九州大学、2008.2.14
- ⑦ 香川県立保健医療大学広報誌「保医大通信」に研究紹介「住民とともに創る研究・《地域が動く！》」2008.8.1
- ⑧ 「福祉広報むれ」に協働活動紹介《安心して暮せる地域づくり in 原クリーンハイツ》2009.8.11

6. 研究組織

(1) 研究代表者

合田 加代子 (GOUDA KAYOKO)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・看護学科・准教授
研究者番号：20353146

(2) 連携研究者

高嶋 伸子 (TAKASHIMA NOBUKO)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・看護学科・教授
研究者番号：90342344

國方 弘子 (KUNIKATA HIROKO)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・看護学科・教授
研究者番号：60336906

太田 武夫 (OTA TAKEO)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・看護学科・教授
研究者番号：80032902

人見 裕江 (HITOMI HIROE)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・看護学科・教授

研究者番号：30259593
中添 和代 (NAKAZOE KAZUYO)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・
看護学科・准教授
研究者番号：30321251
辻 よしみ (TUJI YOSHIMI)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・
看護学科・講師
研究者番号：30353147
大浦 まり子 (OURA MARIKO)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・
看護学科・助教
研究者番号：40321260
林 佳子 (HAYASHI YOSHIKO)
香川県立保健医療大学・保健医療学部・
看護学科・助教
研究者番号：00564618
岡本玲子 (OKAMOTO REIKO)
岡山大学大学院・保健学研究科・教授
研究者番号：60269850